手拭種類以色爲名

〔延喜式十三圖書〕正月最勝王經齋會堂裝○中略

右佛像雜具、並收寮庫、臨事出用、官人二人、史生四人、供火爐火堂童子十二人、用雜色人各給潔衣一領、袴一腰、袜一兩、手巾一條料調布三丈一尺、袍二丈、袴七尺、袜三尺、巾一尺、

〔江家次第十七〕天皇元服御裝束

殿東西渡殿各第一間南砌、立白木案各一脚、高一尺五寸、長二尺、弘一尺三寸、其上置黑漆手洗椀各一口、白巾一條、長一丈、以白木懸之倚於東柱、西准之

〔台記別記〕久安六年正月四日壬午、是日天子○近衛加冠、○中略裝束○中略内藏官人持候白巾一條、細布、長一丈、懸白削木、○下略

〔甲陽軍鑑十一上品第三十五〕扨又山の上より信玄公御覽ずれば、北條陸奥守備より、白き羽織きたる武者一人先にすゝみ、勝頼備にむかつてかせぐ樣子、一段見事なり、○中略二人してわきうしろよりくみ生捕て參れとありて、貳十人衆頭伊藤玄蕃、あひ川甚五兵衛二人、御中間頭原大隅、石坂勘兵衛以上四人、如御意に仕り、軍始まると同時に、彼武者を生捕、白手巾のながきをもつて玄ばり、信玄公御前にひきすゆる、其名を尋被成候へば、北條陸奥守内大石遠江とて大剛の武士也、

〔好色一代男四〕畫のつり狐

玄るしの立くらみといふは、出合茶屋の暖簾に赤手拭を結び置ぬ、

〔嬉遊笑覽二上服飾〕昔々物語に、○中略柿の三尺手拭にて鉢卷して往還するもあり、今は此體にてありく人なし、落穗集にも酉年回祿に、澀手拭の鉢卷したる侍の事をいへり、柿手拭ばぞめ澀也

〔好色一代男二〕髮きりても捨られぬ世

小耳にもおもしろき時は十五才にして、其三月六日より角をも入て、ぬれのきく折にふれて螢みるなど催して、石山に詣でけるに、然も其日は四月十七日、湖水も一際涼しく、水色のきぬ帷子